

『続 羊の歌』 講読会

「第二の出発」①

立命館大学 先端総合学術研究科
西澤忠志

書誌情報

『朝日ジャーナル』9 巻 33 号（1967 年 8 月 6 日）：74-78 頁
旧版（1968）：45-55 頁、新版（2014）：51-62 頁

本章の梗概

1951 年 11 月に日本を出発し、フランスに滞在した最初の一年での体験を綴る。フランス到着直後に逗留した日本館を中心に、加藤は日本人留学生だけでなく、欧米の様々な人と出会った。特に「ブルターニュの青年」「米国の黒人画家」「ドイツ人の画家」「アメリカ人の技師」との出会いと対話は、言葉と文化との関係、信仰、恋愛などの概念の日本と西洋との違いを強く意識させるきっかけとなった。この時点で得た問題意識は、後年の「雑種文化」、『日本文学史序説』などの著作に結実することとなる。

・この章の全体の中での位置づけ

フランスに滞在した時期を取り上げた章（「別れ」まで）の中でも最初期に当たる
「第二の出発」…フランス留学中の「日本館」での同世代の人々との会話を中心

「詩人の家」…フランス留学中の「ルネ・アルコスの家」でのアルコスと彼の娘との会話を中心

凡例

・段落ごとに内容をまとめる際に、以下の段階を踏む

- ① 作品内世界での出来事の実事考証
- ② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造
- ③ 加藤周一の人生における意義

・以下の記号を、この意味で使用する

□ …発表者による補足

【】 …『朝日ジャーナル』版のみに書かれた記述

各段落のまとめ

第1段落（旧版45頁、新版51頁）

一九四五年の秋に、戦後日本の社会に向って出発した私は、五一年の秋に、西洋見物に出かけた。これが私の生涯における第二の出発になった。そのときの私の志は、日本社会のなかの、したがってまた私自身のなかの「西洋」を、その本来の場所において、自分の眼で見極めておきたいということであつたろう。しかしもちろん、事は志とちがって、「西洋」は単に観察の対象ではなくなった。

① 作品内世界での出来事の事実考証

- 「五一年の秋に、西洋見物に出かけた」=1951年に第2回フランス政府給費留学生の自費留学生制度を用いて、医学研究生として渡仏

・文部省によるフランス政府給費留学生

自然・人文・芸術を専攻する94人が4月6日～5月30・31日の間に受験

6月14日に5名の合格者を発表、8月末日に渡仏、1年間の留学を予定¹

私費で留学を希望する者（「自費留学生制度」）にも、往復の旅費と滞在費などを負担するが、フランス政府給費留学生と同様の便宜を受けることができることが、合格発表後に公表²

フランス政府給費留学生試験には不合格したが、自費留学生制度を用いて渡仏

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- 「一九四五年の秋に、戦後日本の社会に向って出発した私は、五一年の秋に、西洋見物に出かけた。」

・1945年秋（第一の出発³）…9月に上田から東京へ戻り、評論活動を始めたこと？

⇕

・1951年秋（第二の出発）…11月に東京からフランスへ出発

→「秋」を軸として、2つの「出発」を二項対照的に記述

- 「西洋見物」（「留学」ではない）

・「見物」という言葉…フランス帰国直後に発表した著作でも使用

「西洋見物の途中で考えた日本文学」「高みの見物について」（1954）

『ある旅行者の思想——西洋見物始末記』（1955）

「高みの見物について」

高みの見物ということばがある。ある社会のなかへ入ってゆかずに、外から大勢をみわたして眺めることをいうのだろう。社会のなかへ入れば、多かれ少なかれ一種の責任をもつことになる。またその社会のなかでの一つの立場をとることになる。高みの見物にはそれがない。無責任であり、特定の立場によらず、すべて

¹ 「フランス留学生決る」『毎日新聞』1951年6月15日3面、「仏留学五氏決る」『読売新聞』夕刊1951年6月14日2面

² 「砂原美智子さんら渡仏」『読売新聞』夕刊1951年8月10日3面

³ 加藤が、自分はよそ者であり、孤立した人間であることを自覚し、かつ社会的現象を全体的に把握しようとする方法を持った「十五年戦争」の時期を「第一の出発」とする解釈も存在する。

鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』（2018）352-353頁

の立場に対し公平な態度をとることができる。(……)たとえば私はフランスの社会をみて、そのなかでごたごた議論しているフランス人の大部分よりも、ごたごた議論されている事柄の結着を早く正確にみとおせるように思う。たとえばいくさの結着、先の見透しというようなことだ。しかしかりに私の見透しが正確であるとして、私の見透しがフランスの社会にとっては何の役にもたたないということも考える。またただ役にたたないばかりでなく、私の見透しの正確さは、私の見透しの役にたたぬということ、そのことを前提としてなりたっていると考え。一般化していえば、高みの見物は正確な判断をあたえるが、その判断は役にたたぬ。たまたま役にたたぬのではなく、役にたたぬことそのことが、判断の正確の条件になっている。つまり事の本質上無益で正確な判断が高みの見物の結果だということになる。従ってもし私と社会との関係が、本来“解釈することが目的でなく、改造することが目的だ、”という原則にたっているとすれば、高みの見物ではこまる。たとえある場合には正確さをいくらか犠牲にしても、有益な判断、役にたつ判断を必要とするということになるだろう⁴。

→「見物」という言葉⁵…「決して当事者にはなれず、観察者あるいは傍観者として対象を考える」
「当事者ではなく観察者であるがゆえに、全体的に客観的に考えられる」

※こうした対象との「距離感」については、『羊の歌』でも言及されている。

→距離感を持ちつつ、全体を見渡そうとする態度が、「見物」という言葉に表されている。

● 「そのときの私の志は、日本社会のなかの、したがってまた私自身のなかの「西洋」を、その本来の場所において、自分の眼で見極めておきたいということであつたろう。」

・なぜ西洋に括弧をつけたのか？

日本社会における実際の西洋へのイメージ（「西洋風」⁶）＋その中で育まれた加藤の西洋へのイメージ
＝日本社会のなかの、私自身の中の「西洋」≠実際の西洋

例：加藤が例示したフランスに対するイメージと実際

私は日本にいたときに、フランスは文化国で、そういう結構な国では、文化があらゆるところに浸透している。下宿のおかみさんでもヴァレリイをよんでいるなどという話をきいたが（……）実地にそういうおかみさんを探してみると、ないことはないが、少い。大衆のあらゆるところに浸透しているのはヴァレリイでもアラゴンでもなくて、探偵小説であり、低能愚劣をきわめた新聞小説であり（……）アメリカ映画である⁷

・「西洋」を「見物」すること＝現地で自身の中の「西洋」イメージを客観的に見極めること

そのため、フランスだけではなく、イギリス、ドイツ、イタリアにも行く

③ 加藤周一の人生における意義

● 「しかしもちろん、事は志とちがって、「西洋」は単に観察の対象ではなくなった。」

・留学当初…医学研究を建前としつつ、「西洋」の「見物」のために渡航

・留学中の変化…「その国に一種の奥行きを感じ、いくらかでもその深さを測るためには、一年程度の滞在は準

⁴ 加藤周一「高みの見物について」『雑種文化』講談社 18-20 頁

⁵ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』（2018）352 頁

⁶ 加藤周一『ある旅行者の思想：西洋見物始末記』（1955）211 頁

⁷ 加藤周一『戦後のフランス：私の見たフランス』（1952）81 頁

備期間にしかすぎないだろう、と考えるようになった⁸⁾

→滞在期間を2年延長し、その結果「その国の言葉、その国の人々との関係、その風俗習慣や季節が、私のなかにしみこんで、積み重なり、相互に反応しながら、体質の一部をつくってゆく⁹⁾」＝ものごとを見る際の視点の一つとして、西洋の価値観を受け入れることとなる

※日本・ヨーロッパを極端に理想化せずに相対的に見ることもつながる

例：『私にとっての20世紀』（初版は2000年に刊行）での回想

ただ、その当時〔1950年代〕は、どちらかといえば、ヨーロッパ、米国が進んでいて日本は遅れているとか混乱しているとか、そういう考え方が一般には強かった。私はそうした風潮に乗らないように、必ずしもマイナスだけではないということをいおうという潜在的な気分はありました。それもフランス滞在で得た経験がきわめて大事でした。つまり、本で読んで得た知識と実際に生活した経験と、両方から見た西洋というものは極楽であるはずはないということです。どこの社会でもそうです。黒い面と白い面、利点と弱点と両方を感じる。圧倒的にヨーロッパだけがいいという考え方は克服されると思う。外国を知っていれば日本がナンバーワンとかなんとかいう幻想は生じようがない。私はそのときにかぎらず、戦後、外国で暮らしている間は日本で起こったことはよくはわからないわけですから、ずいぶんマイナスの面があるのだけれども、それにもかかわらず外国で暮らした経験というのは役に立ったと自分で思うことの一つは、日本のものは何もかも悪いという悲観主義に陥らないということです。外国のものも弱点はたくさんあるから、相対的な問題で日本の伝統は全部悪いという考えは克服できた¹⁰⁾。

第2段落（旧版45頁、新版51-52頁）

東京からの空の旅は早かった。私はオルリー空港からの自動車の窓にパリ市街の灯をはじめてみたとき、羽田へ向う自動車の窓外の街の灯を思い出していた。東京からそれほど遠く離れてきたということを、自分自身に納得させるのは、容易でなかった。「あれがセーヌ河ですよ」と迎えにきてくれた友人―それは私よりも一年まえに来ていた森（有正）さんと一カ月ばかりまえに着いていた三宅（徳嘉）君であった―の一人がいったけれども、私はセーヌ河よりも、漠然とはるかに遠い距離のことを考えていた。

① 作品内世界での出来事の実事考証

● 森有正（1911 - 1976）

フランス文学者、哲学者。東京出身。東京帝大卒。森有礼の孫。パスカル、デカルトなどの近世フランス哲学を専攻し、1950年東大助教授在職中に渡仏。1953年東大を辞してパリに定住し、国立東洋語学校、パリ大東洋学部で日本語、日本文化を講じる。1972年から4年間パリ日本館館長。『遙かなノートル・ダム』以下一連の著作で「経験」の意味を説いた。著作はほかに『パスカルの方法』『デカルト研究』『経験と思想』、エッセイに『バビロンの流れのほとりにて』など¹¹⁾。

⁸⁾ 加藤周一『続 羊の歌』157頁（旧版）、179頁（新版）

⁹⁾ 加藤周一『続 羊の歌』158頁（旧版）、180頁（新版）

¹⁰⁾ 加藤周一『私にとっての20世紀』岩波書店（2009）125-126頁

¹¹⁾ 「もり-ありまさ【森有正】」『日本人名大辞典』（JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>）, (参照 2024-01-13)

※加藤周一との関係

- ・戦時中に東大 YMCA で語り合う（「内科教室」）
- ・敗戦直後、同人誌（『方舟』）に掲載

● 三宅徳嘉（1917 - 2003）

フランス語学者。東京出身。東京帝大卒。1968 年都立大教授、1978 年学習院大教授。フランス言語学、フランス思想史を研究。『新スタンダード仏和辞典』『新和仏小辞典』などの編集にかかわった。訳書にデカルト『方法序説』など¹²。

（フランス政府給費留学生として 1951 年 8 月末に渡仏）

※加藤周一との関係

- ・フランスの哲学者コンディヤックの『感覚論』を共訳（1948）
- ・フランス留学から帰国後も、対談などのやりとりを通じて交友を続ける

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- 「オルリー空港からの自動車の窓にパリ市街の灯をはじめてみたとき、羽田へ向う自動車の窓外の街の灯を思い出していた。」

→距離としては遠いが、外見的には近いという、加藤が感じた印象を表現

はじめてパリの街を見たときに、私は大都会というものはどこでも大同小異であると思い、一年の後東京へ戻るつもりでいた¹³。

→加藤が感じた、東京から遠く離れたことへの現実感の無さを表現？

東京からそれほど遠く離れてきたということを、自分自身に納得させるのは、容易でなかった。

→あるいは、滞在中に感じた日本とフランスとの生活の近さを踏まえての表現？

- ・根拠① 『戦後のフランス』でのパリ到着時の記述…『続 羊の歌』での記述とは異なる

二時間に足りない夜間飛行の後パリの燈火はその窓の闇のなかにわきあがってきたのだ。ネオンの赤や青はなく、白い光の粒が宝石の集まりのように輝き、実に美しい。はじめてみるパリは、大きな寺院のように、まず外から眺めて美しかった。なかへ入ると暗くてしばらくは何もみえぬだろう。しかしその暗さに慣れると焼得ガラスをとおして来る光が、外から見たときとは全く別の美しさを寺院の内部につくりだしているように、パリもまたその内側の美をみせてくれるかもしれない¹⁴。

- ・根拠② 帰国後に感じたヨーロッパでの生活で「全く新しい経験」だったこと

第一に、個人的な生活のあらゆる意味で、日本でのそれまでの生活と質のちがうものではなかったにもかかわらず、社会との関係が本質的にちがっていた¹⁵。

- 「私はセーヌ河よりも、漠然とはるかに遠い距離のことを考えていた。」

- ・セーヌ川

フランス北部、同国の心臓部であるイル・ド・フランス地方を潤し、首都パリを貫流するフランスの代表的

¹² 「みやけ-のりよし【三宅徳嘉】『日本人名大辞典』（JapanKnowledge）, <https://japanknowledge.com>, (参照 2024-01-13)

¹³ 加藤周一『続 羊の歌』157 頁（旧版）、179 頁（新版）

¹⁴ 加藤周一『戦後のフランス：私の見たフランス』未来社（1952）5 頁

¹⁵ 加藤周一『ある旅行者の思想：西洋見物始末記』（1955）211 頁

河川。全長 776 キロメートルで、ロアール川に次ぐフランス第二の川である。流域面積 7 万 8650 平方キロメートルは全国土の約 7 分の 1 を占める。セーヌ川はパリの地形や風景に大きな影響を与えている。南東方向からパリ市に入ったセーヌ川は、中心部をほぼ東から西へ流れ、南西で市外へ流れ出たのち、南北に大きく蛇行する。中心部にはサン・ルイ島とシテ島の両川中島があり、シテ島はパリ発祥の地である。市はセーヌ川を挟んで大きく右岸と左岸に分けられる。両岸と二つの川中島を結ぶ橋の数も多く、河岸は市民や観光客のかっこうの散策地となっている¹⁶。

・技術、ものとは異なる側面への興味→具体的な説明は次の段落で

第 3 段落（旧版 45-46 頁、新版 52-53 頁）

しかしもちろん、その頃の旅客機で南廻り二日間の道中の記憶が、私にものこっていなかったわけではない。香港のせまい街路の両側の窓から雨のように降りそそいでいた麻雀の牌の音、涯もなく広がる東南アジアの密林と深夜のカラチ空港、シリアの白い沙漠と死海、朝のバイルートの空港に黒眼鏡をかけて右往左往していた素姓の知れぬ男女の風俗、地中海の水の宝石のように輝く紺青、夕陽を浴びたマッターホルンの薔薇色の山頂……それらの鮮明で互いに何の関係もない印象は、私の頭のなかにみちていた。その印象のそれぞれには意味がありえたはずだろう。しかし同時にあたえられたその全体について、意味を考えることはできずがなかった。私は、むしろ、羽田で旅客機の座席に坐ったときからパリに到るまで一貫していたただ一つの経験について考えていた。日本語によって意を通じることの不可能な世界。広島では、たしかに、米国人の医者として英語で話していた。しかしそれは日本語の世界のなかで、たまたま私が自分の考えを英語に訳していたにすぎず、周囲の世界の全体が、英語を媒介として、構成されていたのではない。旅客機のなかで、私はすでに、もしすべての考えを外国語で表現するほかはないとすれば、そのことは私の考えの内容にも影響をあたえずにはいないだろう、と感じはじめていた。日本語の考えを、必要に応じて訳しながら、暮すこともできる。しかしそれでは周囲の世界を内側から理解することにはならぬだろう。私がみずからそのなかに身をおいた世界は、それを解釈することが同時に私自身を変えることを意味し、私自身を変えずにその世界を解釈することはできないだろうという点で、そのときまで私の暮してきた世界と、根本的にちがうものである。羽田空港の滑走路に向って滑り出した旅客機の小さな窓から外の灯を見つめながら、私は窓の内側の世界と、外側の世界との断絶を感じていた。東京と私との距離は、そのとき一挙に極大に達したので、旅客機がパリに着陸し、入国の手続をすませて、私の乗った自動車が街を走り出したときに、少しでも大きくなったのではない……。

① 作品内世界での出来事の実事考証

- 1950 年代の東京（羽田空港）ーパリ（オルリー空港）間の航空便
- ・東京→パリへの旅について

1951 年 11 月 3 日夜発、同年 11 月 5 日夜着、所要時間は約 50 時間¹⁷

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- 東京→パリへの旅の中で考えた、「日本語によって意を通じることの不可能な世界。」

¹⁶ 高橋正「セーヌ川」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（JapanKnowledge）, <https://japanknowledge.com>, (参照 2024-01-13)

¹⁷ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』（2018）352 頁

・きっかけ…広島でのアメリカ人の医者との会話…「広島」の章を参照

「日本語の世界」（日本人の考えていること・日本の出来事）を「アメリカ人の医者」に伝える

→既知である日本語・ものを英語にして相手に伝える

⇕

「日本語によって意を通じることの不可能な世界」で暮らす

→未知の言葉を解釈し、理解する必要がある

日本語の場合とは異なり、まず対象に対する理解が必要

・前提…言葉とその国の文化・思想とのつながりを認める考え方

サルトル¹⁸を読んだ経験から？

・「文学とは何か」（1950）〔原題 *Qu'est-ce que la littérature?* 1948 出版〕

「詩人にとって言語は、外的世界の一つの構造である。語る人は言語のなかで状況において (ce situation) ある、言葉に包圍されている。言葉は彼の感覚、缺や触覚や水晶体の延長である¹⁹。」

→言葉を、使う人の感覚の延長と捉える

- 羽田空港の滑走路に向って滑り出した旅客機の小さな窓から外の灯を見つめながら、私は窓の内側の世界と、外側の世界との断絶を感じていた。東京と私との距離は、そのとき一挙に極大に達したので、旅客機がパリに着陸し、入国の手続をすませて、私の乗った自動車が街を走り出したときに、少しでも大きくなったのではない……。

→「窓の内側の世界」…「日本語によって意を通じることの不可能な世界」を一貫して考えていた自身の内面？
窓の「外側の世界」…「日本語によって意を通じることの可能な世界」？

③ 加藤周一の人生における意義

- 「言葉」と文化・社会との関係への注目

例：「言葉と戦車」（1968）、「言葉と人間（コラム）」（1975）など

三宅徳嘉との対談「言葉と文化」（1972）

言葉がどんどん変わっていくということは社会が変わっていくからで、社会が変わっていくということは、活発な若い生命力があって、それはたいへん積極的ないい面だと思うのです²⁰。

- 「言葉」をどう伝えるかへの関心

例：「都市・言葉・人間」（1973）

目下の仕事の中心は「朝日ジャーナル」連載中の『日本文学史序説』です。私が試みてるのは、日本の文学士を、日本語でも英語でも通じる、つまりすべての人に通じる世界へ引き出そうということです。

日本の文学士を日本語特有の習字で書いていくのには限界があると私は考えています。ある言葉について語りうる言葉は、もうひとつ別の言葉でなければいけないでしょう。

¹⁸ サルトル (Sartre, Jean-Paul, 1905-1980) フランスの哲学者、作家。第二次世界大戦後に、無神論的実存主義とマルクス主義の総合を試みて、世界的な影響を及ぼした知識人でもある。

鈴木道彦「サルトル」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（JapanKnowledge）, <https://japanknowledge.com>, (参照 2024-01-13)

¹⁹ サルトル、加藤周一（翻訳）「文学とは何か」『人間』6巻1号（1950）231頁

²⁰ 加藤周一・三宅徳嘉「言葉と文化」『新聞研究』248号（1972）（『辞書、この終わりなき書物』151頁）

そこで私が心がけているのは、なるべく普遍的な概念を用いて、正確に書こうということです。明晰であることへの関心といえますね²¹。

→加藤の「言葉」への関心は、彼の文体や『日本文学史序説』にもひろがる

第4段落（旧版 47-48 頁、新版 53-55 頁）

パリで私が最初に住んだ部屋は、一四区の大学町にあった。大学町には多くの国が、自国の留学生のために寄宿舎を建てていて、そのなかに「日本館」もあり、私はその一部屋に住んだのである。その頃にはまだ日本人留学生の数が少かったから、「日本館」の学生の三分の二は、日本人ではなかった。三度の食事にはかなり離れた建物の中央食堂まで出かけ、そこには他の寄宿舎からも各国の学生たちが集ってきていたので、やがて私は「日本館」以外の学生とも知り合うようになった。しかしそのつき合いは、浅く表面的なものにすぎなかった。言葉が不自由であったということもある。しかしそれだけではなく、相手にとって不足だったということもある。私は同じ「日本館」に住んでいた三宅君や、街の下宿屋に住んでいた森さんと、日本語で話をすることができた。たとえ私がどれほど自由にフランス語を操ることができたとしても、同じ程度の知的刺激を二〇歳前後の留学生たちから期待することは、むずかしかったはずだろう。しかしもちろん例外もなかったわけではない。「日本館」に住んでまもなく、私はブルターニュから来ていた哲学科の学生のひとりと知り合うようになった。彼はサン・ルイの島の古い建物と、サン・シモンの散文を愛し、ドビュッシーを聞き、ニーチェを読み、若くしてすでに孤高の風を備えようとしていた。「フランスの文化の質のなかには、貴族的なものがある、と思う」と彼はいったことがある。また同時に「バステューの牢獄を襲った民衆の伝統があるのだろう」と私はそのときにいった。そうして私たちは、深夜まで議論をつづけた。大学町の寄宿舎の部屋には、寝台と机と椅子が一つずつあるだけで、床には敷物がなく、壁には一枚の絵もかかっていなかった。机上には積み重ねた本と、一本のぶどう酒と、《ゴーロワーズ》の吸殻の溜った灰皿があって、それ以外の何物もなかった。そのとき私は故意に議論を挑撥していたのではない。彼のものの考え方に興味をもち、みずから反対の立場をとることによって、相手の立場をはっきりさせようとしていたのだ。しかしそうするためには、みずからとった立場を弁護しなければならない。結果として私は一晩中、フランス語を喋り、相手の巧妙な言廻しを換骨奪胎して、自分の議論に応用しながら、不自由な言葉を何とか操ろうと努力せざるをえないことになった。それははじめのうち、ひどく骨の折れる仕事であった。しかし慣れるに従ってそれほど面倒でもなくなったのである。私はフランス語で話をすることができたから、論争をしたのではなく、論争をしたから、フランス語で――甚だ不器用にではあるけれども、とにかく意を通じることができるようになったのであろう。私はみずからそのことを感じていたし、そのことが何を意味するかも知っていた。周囲の世界と私との間の距離は、俄にせばまった。

① 作品内世界での出来事の事実考証

● 日本館（Maison du Japon）

正式名称「パリ国際大学都市日本館－薩摩財団」。1925年に創設されたパリ大学をはじめとする首都圏の高等教育機関や研究機関に在籍する世界各国の学生や研究者に宿舎を提供し、あわせて文化・学術の交流を推進することを目的とした学術施設、パリ国際大学都市に位置する。日本古来の城廓を模した地上7階・半地下1階の建物は、フランス人建築家ピエール・サルドゥーが設計したもので、1929年に当時のフランス大統領などの臨席のもとに竣工式を実施。館の周囲は1825平米におよぶ日本庭園となっており、日本館の建物とあいまって大学都市

²¹ 加藤周一「都市・言葉・人間」『波』5月1日号（1973）42-43頁

の一遇に日本的な雰囲気醸し出す²²。

- ・加藤が留学した当時の「日本館」

3分の1の日本人が住む

(国際交流のために各国の寮は自国出身者を70%以下に抑えることが求められたため)

「中央食堂」は「日本館」から遠く離れたところにあるため各国の留学生・研究者との会話のきっかけに²³

- 「ブルターニュから来ていた哲学科の学生のひとり」

- ・名前、在籍校など、詳細は不明

- ・しかし、同時期に加藤は「若いフランス人」と議論を交わしていた

例：「フランス人は相手を親切にするが、打ち解けることはない²⁴」ことについて「若いフランス人」と話し合う

② 『朝日ジャーナル』で連載した際の言葉の文脈、文章の構造

- 「フランス文化」に関する議論

「ブルターニュから来ていた哲学科の学生のひとり」…「フランスの文化の質のなかには、貴族的なものがある」

⇕

加藤…「バスティーユの牢獄を襲った民衆の伝統があるのだろう」

→対立点…フランス文化の質を何に代表させるのか？

- ・敢えて対立する意見を出すことで、立場を明確にしようとする…二項対立を出す論法へ？

③ 加藤周一の人生における意義

- 対談、対話を後年も好んで行う…知的刺激をうけるため、自分の考えたこと・感じたことを伝えたいという強い願望²⁵

私は座談を好んで、演説を好まない。人の話を聞きながら、あるいは自ら喋りながら、考えることをよろこんで、人生意気に感じ、肝胆相照らすことを必ずしも貴ばない。意見はいくらかちがう方が、話しながら考えるのに好都合である。しかしあまりちがいと、話が通じ難くて不便だと思う。幸いにして日本国の雑誌新聞放送には座談会・対談の独特の習慣があって、これは大いに私の嗜好に投じるものであった。頼まれれば喋って、今日までにその数を知らない。²⁶

→基本的な共通点、多少の違い、対談者同士が微発しあえる関係にある時に、生き生きとしたものとなる²⁷

そのため、対談の内容が相手への評価につながる

例：江藤文夫への評価

彼は常に話題の豊富な話し手であったばかりでなく、相手の言ったこと及び言おうとしたことを、ただちに正確に理解するすばらしい聴き手でもあった。私は彼との会話を愉しみ、そこから多くのことを学び、江藤

²² パリ国際大学都市日本館ホームページ (<https://maisondujapon.org/index.html>)，最終確認 2024 年 1 月 10 日

²³ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか：『羊の歌』を読みなおす』岩波書店（2018）353 頁

²⁴ 加藤周一「フランス人の親切について一果たして肝胆相照らしたか」『文芸春秋』30 巻 11 号（1952）102 頁

²⁵ 鷲巣力『加藤周一という生き方』（2012）筑摩書房 152, 159 頁

²⁶ 加藤周一「あとがき」『歴史・科学・現代』平凡社（1973）255 頁

²⁷ 鷲巣力『加藤周一という生き方』（2012）筑摩書房 152 頁

文夫の代表的な作品は、彼のさりげない雑談ではないかと考えている²⁸。

※対談関連の本も盛んに出版される

『歴史・科学・現代：加藤周一対談集』、『二十世紀から』（鶴見俊輔との対談）、『漢字・漢語・漢詩：雑談・対談・歓談』（一海知義との対談）、『加藤周一対話集』、『居酒屋の加藤周一』 etc.

→対談を重視するきっかけとして、フランスでの「ブルターニュから来ていた哲学科の学生のひとり」との対話がある

²⁸ 加藤周一「夕陽妄語 『江藤文夫の仕事』について」『朝日新聞』夕刊 2006 年 7 月 18 日 6 面